



No.6 猫の黄疸は病気のサイン

猫の
医

「猫が飼い主に知ってほしいと思っていること」No.6は、猫の黄疸について紹介します。黄疸はさまざまな病気が原因で起こり、それを知らせるサインでもあります。治療が長期に及ぶ病気も多く、回復のためには家庭でのケアが非常に重要となります。

ほかにも、猫の痛み、子猫の「医」「食」「住」、

子猫のしつけ/予防、また、猫の病気編①甲状腺機能亢進症、②糖尿病/インスリン注射の注意点、猫に薬を飲ませるコツについて紹介したPDFは、アニマル・メディア社のホームページ <http://www.animalmedia.co.jp/> から無料でダウンロードできます。

STEP 1

なぜ黄疸が起きるの？

黄疸とは…

猫の口のなかや目の粘膜、耳の内側や皮膚など、ふだんは薄いピンク色をしている部位が、黄色く変化している状態を言います。

これは、血中にビリルビンという色素成分が増加し、皮膚や粘膜などに沈着して起こる現象です。

ビリルビンとは…

ビリルビンは、寿命を迎えたり、損傷した赤血球が脾臓で分解される際に生じる色素の成分です。赤血球から分解されたビリルビンは、血中から肝臓、肝臓から胆汁の成分として十二指腸に送られ、最終的には便中に排泄されます。しかし、さまざまな原因でこのビリルビンが体の外へ排泄できず、血中濃度が上がると黄疸を呈します。

STEP 2

黄疸の症状はどこにでるの？

目、耳、口の周りのほか、皮膚や爪なども黄色くなっています。

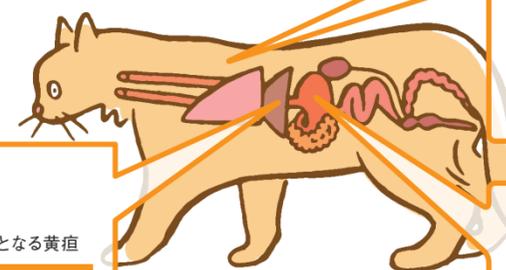


尿の色が濃くなり、重症の場合は、オレンジ色になることもあります。また、元気がない、食欲がない、といった症状や、原因となる病気によっては、嘔吐、下痢といった症状もみられるため、猫の様子をよく観察してください。

STEP 3

猫の黄疸の原因は？

猫の黄疸は、ビリルビンの血中濃度が高くなるために起こりますが、その原因は大きく3つに分かれます。



肝前性 (溶血性とも)

病気や中毒などによる貧血が原因となる黄疸

おもな病気

- 免疫介在性溶血性貧血
- 猫白血病ウイルス
- ヘモプラズマ症
- 中毒(植物、薬剤) など

肝性

肝臓の炎症や脂肪肝など、肝臓そのものの病気が原因となる黄疸

おもな病気

- 肝リビドーシス(脂肪肝)
- 肝炎(胆管炎、胆管肝炎、肝硬変)
- 肝壊死(毒素・薬物・植物)
- 感染症(猫伝染性腹膜炎など)
- 肝リンパ腫 など

肝後性 (閉塞性とも)

胆管や総胆管などの閉塞が原因となる黄疸

おもな病気

- 腫瘍・肉芽腫
- 胆嚢疾患(胆管・胆嚢炎など)
- 三臓器炎(胆管肝炎、膵炎、腸炎)
- 腫瘍 など

STEP 4

検査からわかること

検査は、黄疸の原因となる病気をつきとめるために行います。数値を読み解き、黄疸の原因とならないものを除外していくためにも必須です。



■:基本的な検査
■:必要に応じて行う検査(複数行う場合もあります)

身体検査

- 黄疸の程度や猫の様子(元気があるか、息が苦しそうかなど)を観察し、体温、脈拍、呼吸数などを計測して、異常の有無を調べます。

血液化学検査

- 肝酵素(ALT、ALP、GGTなど)の数値から、黄疸の原因が肝リビドーシスや肝炎であるかを調べます。
- 総タンパク質(TP)とアルブミンを測定し、アルブミン/グロブリン比の低下があれば猫伝染性腹膜炎などを疑います。

血液検査

- 血液の成分を調べ、赤血球数・ヘモグロビン濃度・ヘマトクリット値などから貧血の有無を調べます。あきらかな貧血があれば、溶血性貧血や植物の中毒などを疑います。

尿検査

- 尿中のビリルビンやウロビリノーゲン、尿酸、ケトン体などを調べて、黄疸の原因を調べます。

肝前性が疑われたら

血液塗抹検査

- 赤血球の数や形、ヘモプラズマやハイנטツ小体の有無を調べます。

感染症が疑われたら

ウイルス検査

- FIV、FIPなど感染症の有無を調べます。

肝性、肝後性が疑われたら？

超音波検査

- 胆嚢および肝外胆道系の異常、膵臓・十二指腸病変の有無、腹水・多臓器病変の有無を調べます。

肝性が疑われたら

肝生検

- 黄疸が、肝臓の障害によって起こっている可能性が高く、超音波検査などでは肝臓自体に異常がみられない場合、針を使用して患部から細胞をとる針生検、手術によって肝臓の細胞を採取し、肝臓の状態を確認する肝組織生検を行って、肝臓の異常を調べます。

STEP 5

黄疸の原因となるおもな病気と治療方法

黄疸の症状を改善するには、原因となる病気の治療が必要です。しかし、黄疸の原因となる疾病は多岐にわたり、治療方法もさまざまです。また、回復までに時間がかかり、薬を飲ませたり、食事を適切に与えるといった自宅でのケアが必要となる病気も多く、家族の手厚いケアが猫の症状回復の鍵になってきます。

おもな黄疸を呈する疾病とその治療法

	病気	治療	自宅でのケア
肝前性	免疫介在性溶血性貧血	ステロイドなど免疫抑制薬の投与。効果がみられなければ輸血や脾臓の摘出が必要になることもある。	投薬が必要
	ヘモプラズマ感染症	抗菌薬の投与。重症の場合には、免疫抑制薬や輸血が必要になることもある。	投薬が必要
肝性	肝リビドーシス(脂肪肝)	適切なカロリーの摂取が治療の中心になる。肝不全があれば肝性脳症の治療が必要になる。嘔吐や食欲不振、脱水に対する治療のほか、十分な食欲が出るまで食道栄養チューブを設置することもある。	食事療法 投薬
	胆管炎	感染症が原因の場合は抗菌薬の投与、薬物などの中毒の場合は原因物質を体外に排出し、輸液、肝底薬を投与して体力の維持をはかる。	投薬が必要
肝後性	胆嚢疾患(胆嚢炎・胆管炎など)	輸液、抗菌薬などで症状を緩和する。閉塞が緩和していれば、胆汁の分泌を促進するウルソデオキシコールなどを投与する。胆嚢が破れて胆嚢腹膜炎が疑われる場合は、胆嚢を摘出する。	投薬が必要
	膵炎	輸液、制吐薬、鎮痛薬などで対症療法を行う。炎症のコントロールのためにステロイドを使用することもある。食べ物を受け付けない場合は、カテーテルで腸内に直接栄養を送る。肥満の猫では栄養療法を行う。	食事療法 投薬

ほかに猫伝染性腹膜炎や猫免疫不全症候群、腫瘍などの重い病気が原因となることもあります。

STEP 6

治療が始まると...

動物病院で治療を受け、あるいは治療のための入院から自宅に帰ってきた猫が、すぐに元のような元気を取り戻す、というわけにはなかなかいきません。回復に時間がかかったり、薬の副作用などが出ることもあり、とくに最初のうちは下のような状態にあるかもしれません。



薬や食事をを上手に与えるには

猫も人間と同じで、決められた薬の用法・用量があり、それを守って飲ませる必要があります。ただし、猫は人間と違い自分から薬を飲んでくれません。猫に負担をかけずに薬を与えることが重要です。また、黄疸の原因となる肝リビドーシス(脂肪肝)などでは、嘔吐感が強く食欲がまったくなくな

ることもあります。こうしたケースでは、食事にまぜて薬を与えることは難しくなります。また、猫にとって栄養を取らないことは文字どおり命取りです。1日に決められた栄養を確実に与えていくことも、大切なケアの1つです。



保定の際は、利き手と逆の手で頭をしっかりと押さえる



猫を上向かせ、利き手で口を開かせ、舌の中央、奥のほうに薬を置く



猫を上向かせたまま、喉をさするようにし、飲み込ませる



スポイトで少量の水を与え、飲み込みやすくする。液体薬、液状の食事この方法で与えられる

それでもうまくいかないときは?

猫のためとはいえ、無理やり薬を飲ませたり、食事をとらせるのは、家族にはつらいことです。しかしもっとつらいことは、投薬や食事が猫にとって「嫌なこと」になり、その嫌なことを無理やりさせる家族を「嫌な人」だと認識してしまうことです。こうなると、食事のときに隠れてしまったり、攻撃的になることもあります。自宅でのケアのために、猫と家族の信頼関係が損なわれることは、お互いにとってもっとも不幸なことです。



猫に
異常がみられたら
すぐに動物病院で
診察を受けましょう

もし一般的な方法でうまくいかないときには、深く悩まず、猫ちゃんの性格に合わせたお薬や食事の与え方について動物病院に相談してみましょう。投薬のお助けグッズの紹介や投薬方法のレクチャーやアドバイスが受けられます。飼い主のあなたも私たち病院スタッフも猫ちゃんの健康と幸せを願う、同じチームの一員です!

